

I 章 未来ビジョンの役割

～なぜ未来ビジョンが必要なのか～

現在の自由が丘のまちづくりが道標としてきた「コミュニティマート構想」の策定から30年超の時間が経過

- 昭和63（1988）年度に策定された『自由が丘商店街活性化モデル事業報告書（通称コミュニティマート構想）』（自由が丘商店街振興組合）は、自由が丘の個性を高めていくことを目標として地元の商業者が中心となって作りあげた構想書である。
- 当構想では、街並み景観形成のルール作りや自由が丘文化を象徴するユニークでドラマチックな空間の必要性などが提唱され、その後、当構想に基づいてマリクレール通り、九品仏川緑道、サンセットアレイ、駅前広場など今日の自由が丘の魅力を支える環境が整備された（右頁参照）。これらの整備にあたっては、目黒区による都市計画マスタープラン、都市再生整備計画、地区計画等が下支えとなってきた。
- 『コミュニティマート構想』については、実現できていない構想や積み残している課題もあるなかで、当構想の策定から既に30年以上が経過していることと、この間の社会経済情勢の変化を踏まえ、次代に向けたまちづくりの基本的な考え方を整理した『自由が丘駅周辺地区グランドデザイン』（2020年度）が都市再生推進法人(株)ジェイ・スピリットによって策定されたところである。

近年における急速な情報技術の革新や超高齢化社会の進行、地球環境問題の顕在化などまちを取り巻く情勢が激しく変化

- コミュニティマート構想の策定後、バブル経済（1986-1991年）の崩壊やリーマンショック（2008年）といった経済面での打撃や、阪神・淡路大震災（1995年）や東日本大震災（2011年）に代表される自然災害による社会面での混乱が起きる中でも、自由が丘の街は地元の努力と行政の支援により、`選ばれる街、としての地位を獲得・維持し続けている。
- 一方で、生活様式を大きく変化させている情報技術の急速な革新、人口減少と並行する高齢化の進行、あるいは地球環境への負荷拡大といった社会経済現象に対して、自由が丘全体として向き合うことが余儀なくされている。
- 2020年初頭に発生した新型コロナウイルスによるパンデミックの経験もまた、都市衛生という観点から生活・就業の場のあり方など次代のまちづくりを考える際の重要な教訓をもたらしている。

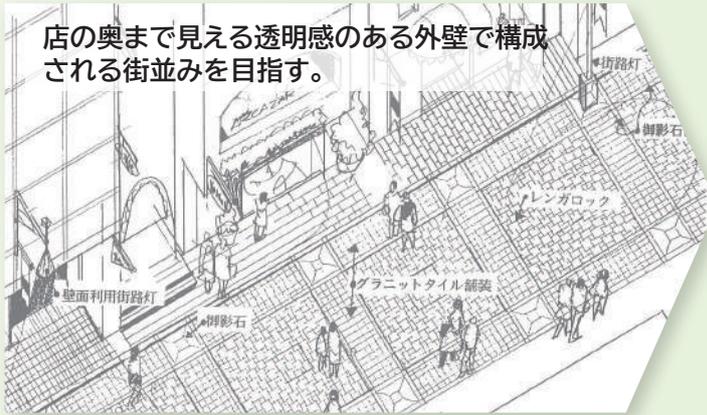
今後予想される社会経済情勢の急速な変化の中でも、自由が丘が自由が丘たりえる文化性を次代に継承・発展させていくことを目指して、まちづくりがひと回りする30年後を視野に、『自由が丘駅周辺地区グランドデザイン』をベースとした新たなまちづくりの道標として『自由が丘未来ビジョン』を策定する。

【コミュニティマート構想における基本方針】

【現状】

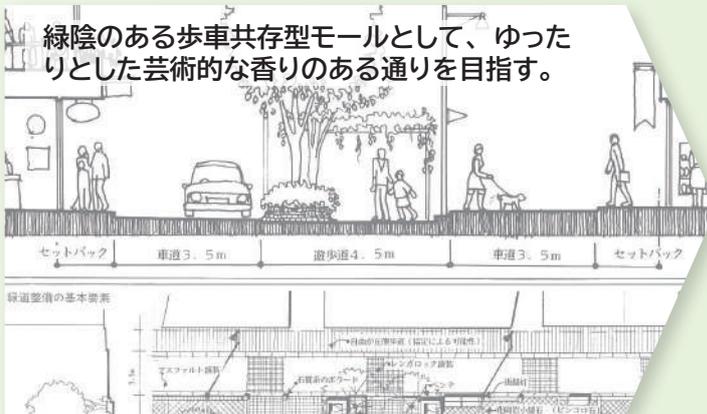
マリクレール通り

店の奥まで見える透明感のある外壁で構成される街並みを目指す。



九品仏川緑道

緑陰のある歩車共存型モールとして、ゆったりとした芸術的な香りのある通りを目指す。



サンセットアレイ

自由が丘商業地のリーダー的役割として人間優先の街路と魅力ある街並みを目指す。



駅前広場

ヒトとクルマの面積配分を逆転させ、多目的利用のできる人のための広場を目指す。



〈このページは空白ページです〉

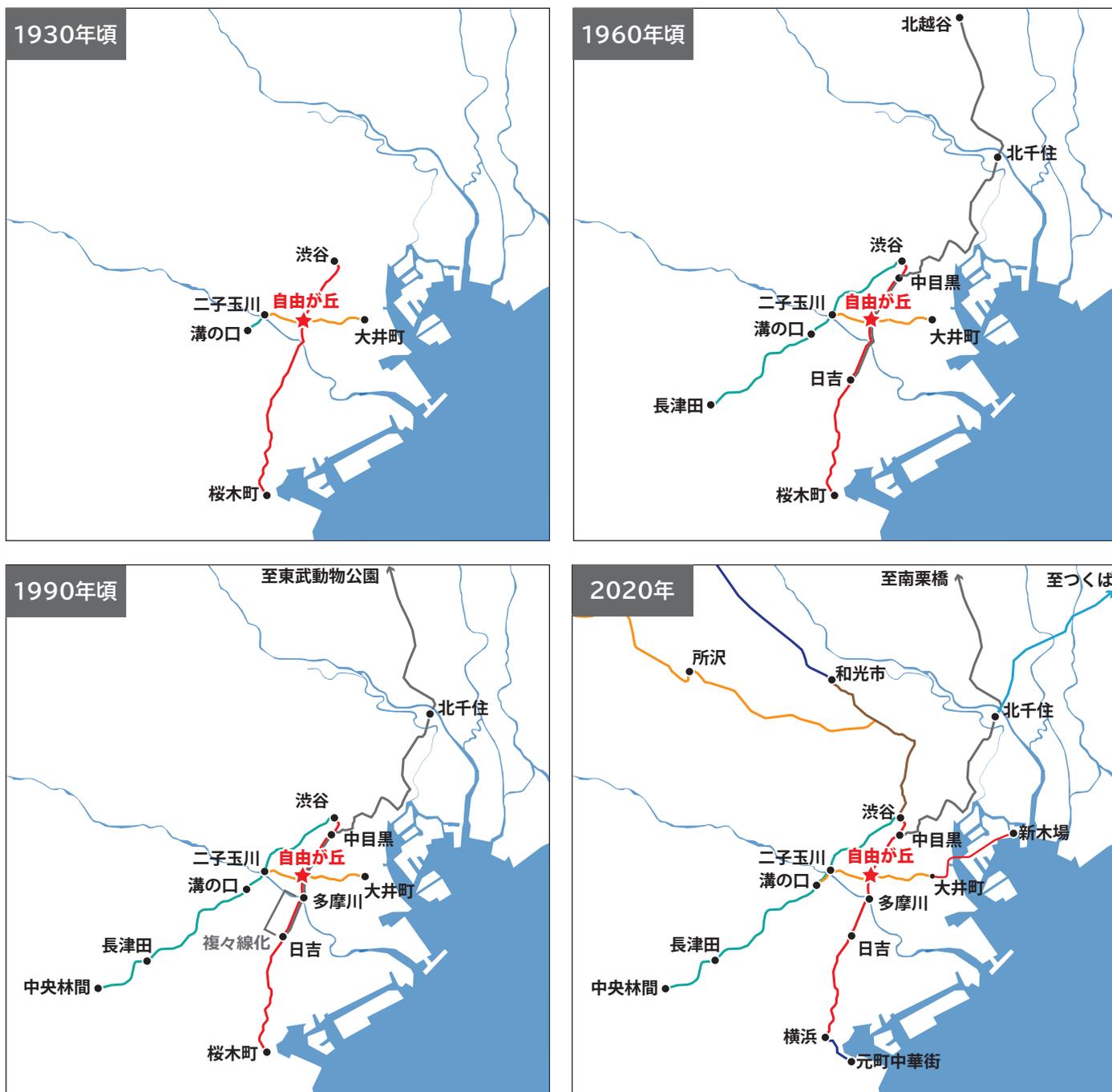
II章 現在の自由が丘の課題

～次代に向けて自由が丘が何を意識すべきか～

1. 自由が丘を取り巻く状況

① 鉄道網の拡大による自由が丘の拠点性の強化 (■これまで・現状、●これから)

- 1927年に九品仏駅という名称で開設された現在の自由が丘駅は、当初から東京横浜電鉄東横線と目黒蒲田電鉄大井町線という2線が乗り入れることで、自由が丘は東京郊外辺縁部における重要な乗換駅を抱える街として発展を遂げていく。
- 1964年の日比谷線との相互直通運転開始（2013年に終了）をはじめ、1990年代の複々線化、2000年代に入ってからのみなとみらい線や副都心線（副都心線経由での東武東上線・西武池袋線を含む）との相互直通運転により、自由が丘は東京都内および神奈川県・埼玉県まで鉄道を介した来街者圏域を拡げている。



- 自由が丘は、京浜エリアにおけるさらなる鉄道網の拡大により、これまで以上に鉄道結節点としての拠点性が高まるものと考えられる。
- 2019年度末以降世界各地での新型コロナウイルス感染拡大を契機として、仕事のあり方や生活様式が急速に変化する中で、東京と横浜の中間(都心辺縁部)に位置する自由が丘は、近傍のみならず、公共交通を活用した東京・神奈川・埼玉など遠方地域から集まりやすい街であり、閑静な住宅地と文化性を備えた商業地であることに加えて、新たな働き方が可能な街としてさらなる発展の機会が訪れている。

自由が丘駅に乗り入れている路線及び比較的容易な乗換で遠方地域（他県）とのアクセアが可能な路線



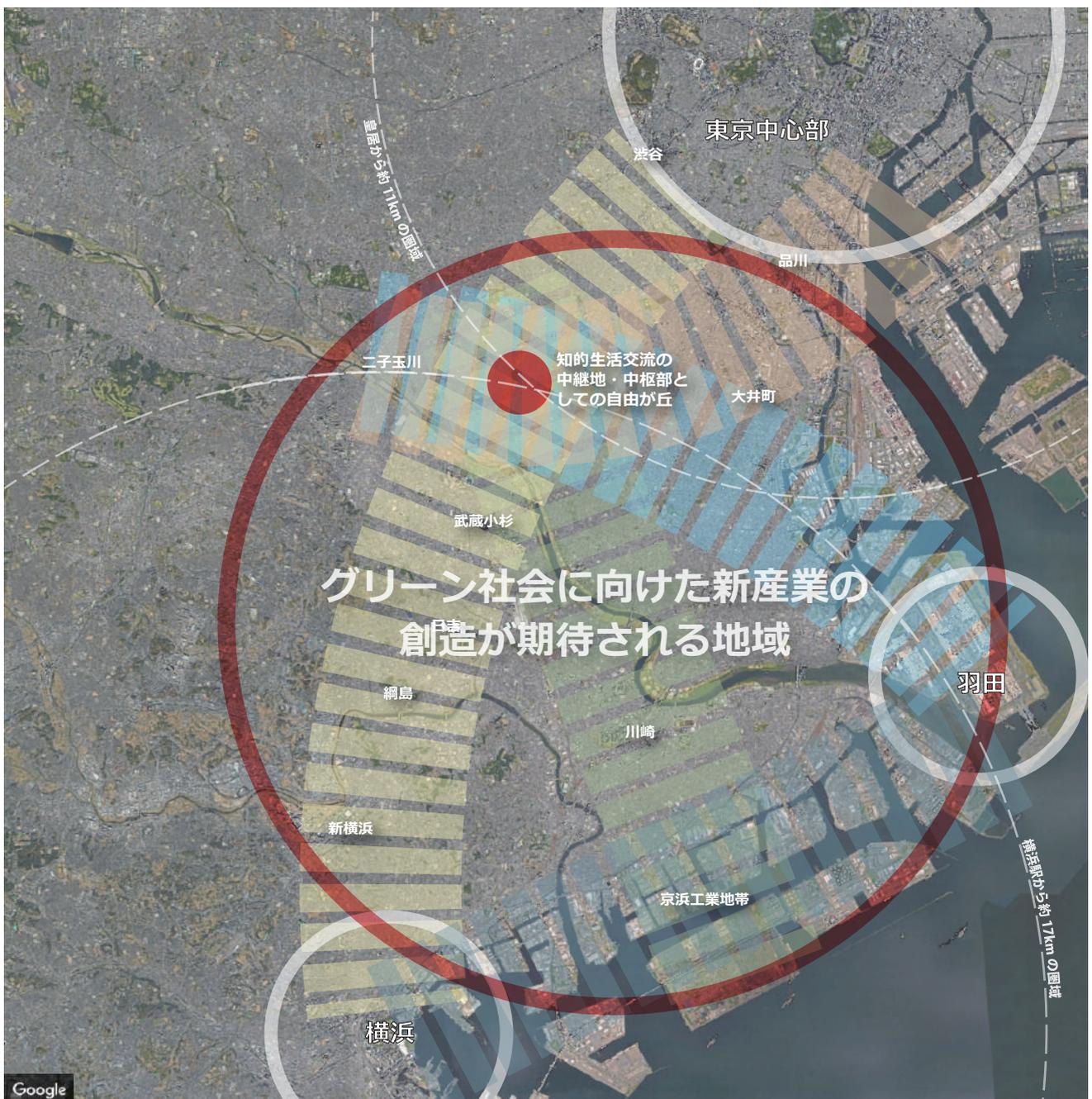
②自由が丘を中心とした地域における新産業創造の兆し (■これまで・現状、●これから)

- 自由が丘は、東京から横浜にまたがる京浜エリアにおける鉄道の結節点に位置しており、東急線沿線における、Google（渋谷）、Apple（綱島）、楽天（二子玉川）といった今日の世界的なIT社会を牽引する企業のほか、横浜みなとみらい地区における日産、村田製作所といったグローバル企業の本社や技術研究所、新横浜駅周辺に集積する技術企業とも短時間でアクセス可能な街となっている。
- また東京工業大学や慶応義塾大学など多分野の学術機関、次世代型産業の集積が期待される京浜工業地帯、我が国の技術を支える大田区近傍のものづくり環境とも極めて近い街である。



- 明治期以降の我が国の経済発展を支えてきた工業系機能が集積している京浜エリアに、近年IT系企業の本社や研究所などが数多く立地してきている状況や、産学連携により次世代型の技術革新が起こりつつある周辺環境を、自由が丘は強く意識することが重要である。
- 当該エリアは、次代に予想されるグリーン社会※の到来に対して、〈グリーン×デジタル〉分野での新産業を生み出していく最も有力な地域であり、自由が丘は多様な「知」が結集・交換される交流の中継地・中枢部を担う街に立候補できる立地環境にある。

※グリーン社会とは、地球環境対策を基軸とした脱炭素社会、気候変動適応社会、自然共生社会、循環型社会を広く包含する概念であり、先進技術を駆使しながら自然環境への配慮と共に、超高齢化する状況の中であらゆる人への優しさや新たなライフスタイルを提供する社会である。



- 大正から昭和初期に多彩な文化人達の集まりを受け入れることで生まれた自由が丘は、〈自由(=Liberty)の思想〉のもとに、90年以上の間、他の都市や街とは異なる発展の仕方をしてきており、戦後～近年における「女性ファッションの街」「雑貨の街」「スイーツの街」と呼ばれてきた生活感度の高いまちづくりの取組みも、〈自由の思想〉の遺伝子によるものと考えられる。
- 時代を先読みし、新たな枠組みを始める、大らかに物事を捉える〈自由の思想〉を、次代の技術や価値観と融合させていくことが、自由が丘の最重要課題である。
- その際、2022年4月に自由が丘商店街振興組合と株式会社ジェイ・スピリットが宣言した「自由が丘SDGs宣言」を、まち全体として具現化していくことが今後の基軸になると考える。

